

続 「あとき駒村正治先生は若かった」

「翠萌誌」平成 25 年号

三重大学大学院 成岡 市

1. はじめに

学術論文を読む時の方法の一つですが、漫画や小説を読むのとはちょっと違った読み方があります。「解説」という言葉の方があてはまっているかもしれません。

たとえばのお話としまして、①タイトル、キーワード、要旨(だいたい論文の冒頭にある)に目を通す、②結論・要約(だいたい論文の末尾にある)を読む、③雑誌名と発行年を確認する、という順番があります。

これらの順で所々の情報が頭に入ったところで、本文に挿入されている「図表写真」を眺めていきます。もし時間に余裕があったら、「本文」を最初から最後まで熟読します。ですから、場合によっては全文を読破することが無いこともあります。

実は、このような手順を、私は 20 歳頃から 60 歳に届きそうになった現在に至るまでやっています。「駒村正治」(敬称略)というお名前の入った論文や原稿をどれだけ拝読させていただいてきたことでしょうか……。

順を追って理解していくのが正攻法なら、拾い読みをしてその蘊奥(うんおう;レシピ)を理解する方法もあるかもしれません。もしかすると、私の勝手な「駒村正治論」は後者から得たものであり、駒村先生ご自身(の人生)は前者なのかもしれません。

2. あの時、本人を目撃したのです

遠い昔、それは私が 24 歳の時でした。その頃の私の悪行三昧・失礼千万は、この翠萌誌のどこかで暴露されているかもしれません。

その春、東京農業大学の学部正規生として、当時の農業工学科に入学させていただきました。新生生オリエンテーションの始まる大きな教室で、数人の先生方が自己紹介のため壇上に立っておられました。

その中に、あの駒村先生がいたのです。当時、論文の中でしか知らなかった「農大の駒村先生」を目撃した、という印象です。かなりのドキドキ感がありました。駒村先生の髪は黒く濃く、背筋は真っ直ぐでした。

この「目撃事件」以降、論文や何かの書物を読む時は、執筆者が何歳の時の仕事だったのかを注意深く考える癖がついていました。人の年齢を意識するより、人の人生を意識し、自分の何かしらの糧にすることにしたいという気持ちになっていたのです。「先人の背中を見ながら追いかける」という言葉が適切と思っています。

3. 還暦の次は「緑寿」

「還暦」(かんれき)という、人の節目の年があります。

干支(十干十二支)が一巡して、起算点となった年の干支にふたたび戻り、数え年六十一歳(満 60 歳)のことをいうのだそうです。十二支を 5 回繰り返して、さらに半回りして 66 歳が緑樹と呼ばれる。これはどこかの百貨店が編み出した記念日なのだそうですが、節目はいくらあってもいいですね。駒村先生は緑樹を迎えられました。

ずっと昔のことです。ある著名な先生が、70 歳をはるかに超えられた杉二郎先生(故人)

が構えておられる農大総合研究所(NRI)にご挨拶にみえて、「杉先生、私もようやく還暦になりました」とお礼の言葉を発せられました。その時、「君もようやく一人前になったね」という言葉がありました。その時同席していた私は 40 歳にも満たない頃であり、「おまえのような若造は」と鼻であしらわれてしまいました。

今、駒村先生は 70 歳に近づき、小生は還暦に限りなく接近中です。先日、大変失礼と承知しながら、「駒村先生、ずいぶんシボンでしまわれましたね」と申し上げたところ、「畑地灌漑の専門家」の駒村先生は無言でした。

4. おわりに

駒村正治先生は、農地工学・畑地灌漑をライフワークの一つとされています。

往年の頃のように現場を走り回ることにはほとんどないのかもしれませんが、大震災と原発事故の二重苦・苦境に立たされた福島県相馬地区で農地の復旧・復興に取り組んでいらっしやると伺いました。

「翠萌」に込められた精神のごとく、駒村正治先生の背中は、いつまでも凛々しいですゾ！

引用

成岡市(2006):あのとときもこのときも駒村正治先生は若かった、翠萌誌(東京農業大学)、平成 18 年号

故 駒村正治先生 略歴

昭和 22 年 (1947)	東京都に生まれる
昭和 44 年 (1969)	東京農業大学農学部助手採用
昭和 60 年 (1985)	農学博士授与
平成 7 年 (1995)	東京農業大学農学部教授
平成 24 年 (2012)	東京農業大学定年退職
平成 24 年 (2012)	東京農業大学名誉教授
平成 27 年 (2015)	台湾宜蘭(ギラン)県にて逝去